

2017年11月12日（日）「相続地としての子どもたち」

詩篇 127:1-5

0 都上りの歌。ソロモンによる

1 主が家を建てるのでなければ、建てる者の働きはむなしい。主が町を守るのでなければ、守る者の見張りはむなしい。2 あなたがたが早く起きるのも、おそく休むのも、辛苦の糧を食べるのも、それはむなしい。主はその愛する者には、眠っている間に、このように備えてくださる。

3 見よ。子どもたちは主の賜物、胎の実は報酬である。4 若い時の子らはまさに勇士の手にある矢のようだ。5 幸いなことよ。矢筒をその矢で満たしている人は。彼らは、門で敵と語る時にも、恥を見ることがない。

【序論】

今日は礼拝の中で「幼児祝福式」を執り行ないました。一人びとりの頭に手を置いて祝福の祈りをささげるとき、私のような者であっても祝福の伝達者とされていることに畏れを抱きます。その祝福とは、私自身から出ているものではなく、アブラハム・イサク・ヤコブに祝福をお与えになった神からのものです。この祝福は、遠い昔に途絶えたものではなく、今も神の民に、教会に注がれ続けています。キリストの体なる教会は、世界の祝福を担っているのです。その意味で、幼児祝福式というのは、形だけのものではなく、次世代に祝福を取り次ぐ重要性を秘めたものでしょう。

【本論】

今日選びました詩篇 127 篇は、幼児洗礼や献児式によく読まれる箇所です。子どもに関する内容は3節以下に出てきますが、全体の流れの中で捉えていきたいと思います。

本論 1. 神に頼らぬ者の働きの虚しさ

まず、タイトルが「都上りの歌。ソロモンによる」となっていますが、これが本当にソロモン王によるものであるかは定かではありません。と言いますのは、この詩篇は内容的に捕囚から帰還した人々によるエルサレムの復興が背景となっているからです。ソロモンは最初に神殿を建てた人でありますから、彼の名前が当てられたのかも知れません。

主が家を建てるのでなければ、建てる者の働きはむなしい。主が町を守るのでなければ、守る者の見張りはむなしい。あなたがたが早く起きるのも、おそく休むのも、辛苦の糧を食べるのも、それはむなしい。主はその愛する者には、眠っている間に、このように備えてくださる。

(127:1-2)

ここで「むなしい」という言葉が3回繰り返されているのに注目しましょう。家を建てるこ

と、町を守ること、日夜を問わぬ労苦、これらは人間の勤勉な業であり、尊いものです。ところが、詩人は神なしにそれらを行なう虚しさを語っている。ユダヤ民族は捕囚から帰還し、破壊された主の神殿は二の次に、自分たちの家の再建に躍起になりました。

「この宮が廃墟となっているのに、あなたがただけが板張りの家に住むべき時であろうか。今、万軍の主はこう仰せられる。あなたがたの現状をよく考えよ。あなたがたは、多くの種を蒔いたが少ししか取り入れず、食べたが飽き足らず、飲んだが酔えず、着物を着たが暖まらない。かせぐ者がかせいでも、穴のあいた袋に入れるだけだ。万軍の主はこう仰せられる。あなたがたの現状をよく考えよ。山に登り、木を運んで来て、宮を建てよ。そうすれば、わたしはそれを喜び、わたしの栄光を現そう。主は仰せられる。あなたがたは多くを期待したが、見よ、わずかであった。あなたがたが家に持ち帰ったとき、わたしはそれを吹き飛ばした。それはなぜか。--万軍の主の御告げ--それは、廃墟となったわたしの宮のためだ。あなたがたがみな、自分の家のために走り回っていたからだ。それゆえ、天はあなたがたのために露を降らすことをやめ、地は産物を差し止めた。わたしはまた、地にも、山々にも、穀物にも、新しいぶどう酒にも、油にも、地が生やす物にも、人にも、家畜にも、手によるすべての勤労の実にも、ひでりを呼び寄せた。」(ハガイ1:4-11)

これは、神を礼拝することなしに自分の生活に没頭するあらゆる時代の信仰者への警告とも言えるでしょう。神なしに生きるとき、人はすべてを自分の力でやらなくてはならなくなるのです。どんなに尊い仕事であったとしても、そこには虚しさが残る。神の栄光が欠落しているからです。2節後半で「主はその愛する者には、眠っている間に、このように備えてくださる」と言われているように、私たちが無力になる睡眠中にも、神は動いておられるのです。確かに、畑の作物は人が知らぬ間に成長します。

『大草原の小さな家』で、インガルス家の父親チャールズが日曜日にも畑を耕している場面が出てきます。妻キャロラインが咎めると、「神が耕してくれるのか？」と答える。キャロラインは「冒瀆だわ」と怒る。面白いですが、このやりとりは、神に信頼しきれない人間の姿を描いているでしょう。私たちは神の力を信じているのでしょうか。これは信徒だけの問題ではなく、牧師も神に頼ることなく聖務をどうにか自力で行なう危険性と背中合わせなのです。すべての仕事の前に祈りをささげているかどうか、自分の心が神に向いているかどうか、今一度自己吟味が必要でしょう。

本論 2. 相続地としての子ども

神に信頼するところに一切の祝福が伴うというのが、この詩のメッセージです。そして3節以下では話が展開し、子どもを授かるということが祝福の一つの側面として描かれています。神の祝福は多岐に及びますので限定することはできませんが、ここではその一つの形として「子どもを授かる」ということが取り上げられているのです。今日は「教会に与えられた子どもたち」と拡大解釈して、このことを考えていきたいと思えます。

見よ。子どもたちは主の賜物、胎の実は報酬である。若い時の子らはまさに勇士の手にある矢のようだ。幸いなことよ。矢筒をその矢で満たしている人は。彼らは、門で敵と語る時にも、恥を見ることがない。(127:3-5)

子どもは、私たちが思うようにもうけられるものではなく、思い通りに育てられるものでもないことを、私たちは知っています。子どもは神から授かる賜物、預かりものにほかなりません。「賜物」と訳された言葉は、原文では「相続地」(ナハラ)という言葉が使われています。神はイスラエルの民に相続地としてカナンの地をお与えになりました。

こうしてヨシュアは、その地をことごとく取った。すべて主がモーセに告げたとおりであった。ヨシュアはこの地を、イスラエルの部族の割り当てにしたがって、相続地としてイスラエルに分け与えた。その地に戦争はやんだ。(ヨシュア 11:23)

ここに出てくる「相続地」という言葉は、今日の詩篇の「賜物」と同じ言葉です。つまり、詩人の言わんとしていることは、子どもという存在は安住の地を得るほどに安心を与えてくれるものだということでしょう。教会も次の時代を担っていく器がなければ、先細りの一途を辿ります。群が成長し、子どもが大人になり、やがて教会を支える器になっていただかなくてはならないのです。これは何も一教会レベルだけで考えることではありません。日本全国の教会が同じ認識を持ち、他教会の必要なところに送り出していけるほどの繁栄が必要です。子どもというのは、キリスト教会全体にとっての相続でもあるのです。

4節に「若い時の子らはまさに勇士の手にある矢のようだ」という面白い表現が出てきます。「若い時の子ら」とは「夫婦が若いときに生まれた子ども」という意味ですが、これは読み方によっては誤解を与えるかも知れません。年寄り子は含まれてこないのか。ここで詩人が言わんとしていることは、早くに生まれた子どもは家族にとって戦力になる日も早いということでしょう。そして、両親が年老いたときには成人して力を発揮し、親を支えてくれるようになる。そのような子どもがここでは「勇士の手にある矢」に例えられているのですが、子どもが戦いの武器のように、強力な可能性を秘めていることが表現されています。もちろん、年寄り子が役に立たないということではありません。実際、ヨセフはヤコブの年寄り子でしたが、最終的に一家・一族を飢饉の滅亡から救う働きをしました。

更に、「幸いなことよ。矢筒をその矢で満たしている人は」とも言われます。「矢筒」とは家の比喩であり、教会の比喩としても捉えることができます。「矢で満たしている」とは子どもで満ちているということでしょう。「彼らは、門で敵と語る時にも、恥を見ることがない」というフレーズの意味は少々掴みにくいのですが、当時の裁判事情を表しているのかも知れません。裁判の場であった「門」で語る時、子どもたちが助言者となり、何らかの形で親をサポートしてくれるということだと思われまます。

いずれにせよ、ここで描かれている子どものイメージは大変に力強い。今日祝福にあずかった子どもたちは、今は幼いですが、瞬く間に成長し、勇壮に大人の仲間入りを果たしていきます。ただ微笑ましい、愛らしいという思いではなく、力強さと頼もしさを見出したいものです。

本論 3. 与えられた幼い魂に対して教会が果たすべき責任とは

最後に、この子どもたちが教会に集っていることの意味に目を向けてみましょう。私たちは彼らが「光の子」として成長し、主の祝福を浴びて、やがては祝福を与える人になってくれることを願います。しかし、子どもは放っておけば自動的にそうなるというものではありません。彼らが主の愛のうちに歩み続けるためには、絶え間なき祈りと聖書教育が不可欠であり、信仰の先輩の助言や励ましを求められ、キャンプなどを通して霊的に鼓舞され、信仰の友を得ることも必要です。この霊的土台の構築は「早すぎる」ということはないでしょう。私自身も経験したことですが、中学・高校で通る部活や受験との戦いに勝利していくためには、幼少の頃から築き上げられた神との関係が不可欠なのです。部活や受験はとても大切なことです。それらと向き合いながら、如何に神を第一とした生き方を続けていくかという、新しい思考と工夫が求められていくのです。教会としても彼らをサポートする意思と力が必要であり、(これは個人的な見解ですが)、小学校の6年間に築いた土台が、中高の6年間を支えると思われまます。私自身はその土台が脆弱であったため、危なっかしい青年時代を過ごしました。私が今この働きに就いているのはまさしく主の憐れみであり、与えられた恵みであり、大学以降で長い時間をかけて整えていただいた霊的生活と神学的な学び、そして多くの人の祈りの結果です。

話がやや広がりましたが、今日祝福にあずかった子どもたちの将来のために心を尽くして祈っていただきたいと思います。大きな可能性を秘めた子どもたち、それでいて道を踏み外しやすい子どもたち。大人の導きがなくては、子どもは主の御前を歩み続けることが困難な存在なのです。大人は生き方において模範を示し、どんなときにも子どもを受け入れ、つまずいたときにも信じて祈り続ける。神がそれぞれに与えてくださった相続地、教会にとっての相続地として、大切に育てていきたいと願わされます。

【結論】

幼児祝福式は、喜びのときであると同時に、心を引き締めさせられるときでもあります。信仰継承の問題はどの時代でも難題です。しかし、この継承は当たり前になされる必要があるのです。親が信じている神、親が心から信頼している方を子どもが見上げるならば、そこに信仰が現れてくるでしょう。私たちの全生活が神に依り頼むものであるならば、そこに「むなしさ」の片鱗すら見出されないのであれば、子どもたちはすべてを満たしてくださる神を見出すようになるはずです。この良循環を作り出していきたいと思ひます。

【祈り】

祝福の基であられる天の父なる神様。あなたは古より、ご自身の民に祝福を与え、その信仰を継続させて来られました。と同時に、人間はあなたに信頼するという点において、まことに失敗をし易い存在です。見えるものに依り頼みたくなる誘惑を取り除け、あなたをまっすぐに見つめさせてください。そして、一人ひとりに、一つ一つの家庭に、必要を満たしてください。今日祝福にあずかった子どもたちが、ヤハウェなる神を知り、生涯恵みと共に歩むことができますように。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、

ご自身との契約の下に、アブラハム・イサク・ヤコブに祝福を与え給うた、父なる神の愛、教会を通して、尚も全世界を祝福し給う、主イエス・キリストの恵み、次世代の信仰の担い手に働きかけ、各々の家庭、群にとっての相続地とならせ給う、聖霊の親しき交わりが、あなたがた一同の上に、とりわけ今日幼児祝福式にあずかった子どもたちの上に、その家族の上に、限りなくあらんことを。